

復興デザイン会議 第2回全国大会

# ポストコロナの都市像を描く

－現場・規範・理論－

2020年12月5日（土）・6日（日）

オンライン開催

（※東京大学内で開催する審査会・講演等を配信いたします）

主催：復興デザイン会議

COVID-19 の感染拡大下において、働き方、暮らし方、文化活動、社会サービスや情報、移動は、長い時間の中で私たちが形成してきた従前の都市のイメージを既に変えつつあるのではないかと。このような変化は、情報技術の発展に加え、私たちの国土が人口減少や高齢化、縮退局面の時代に入っていることと無関係ではないだろう。東日本大震災から10年目を迎えようとする中、南海トラフ地震や首都直下地震の事前復興に向けた接続点を見出し、ウイルスとともに歩まざるを得ない私たち自身の未来に向けて、次の都市像を描くことはできるだろうか。

自らに向けた問いを更新し続けながら、傷ついた地域にまだ踏みとどまり、復興の「現場」で格闘を続ける実践者と、被災地に自然する人々の営みの「規範」の解明と、その「理論」化に取り組み続ける研究者が互に向き合い、高校生も泰斗も分野も立場も超えて、徹底的に議論を行うこと。その徹底した対話を頼りに、来るべき巨大災害と常態化する地域の危機の解決と復興に向けた知見体系化に向けた回路を開き、推進するための実践的な研究者と実践者のネットワーク構築を目指して、復興デザイン会議の第二回全国大会をここに開催します。



12月5日(土)

12月6日(日)

9:00-11:00

U-30 復興デザインコンペ 公開審査会・作品展示討論会

開会挨拶 原田 昇 (中央大学・復興デザイン会議会長)  
作品展示討論会 (ポスターセッション → 動画審査)

審査委員

内藤 廣 宮城 俊作 乾 久美子  
高橋 一平 千葉 学 野原 卓 羽藤 英二

コーディネート: 井本 佐保里

12:15-13:45

防災地理部 私たちのまちと事前復興を考える

今治西高等学校 伯方分校 宇和島東高等学校  
今治北高等学校 大三島分校 愛光高等学校  
八幡浜高等学校 三崎高等学校  
コーディネート: 小関 玲奈

13:50-15:45

U-30 復興デザインコンペ 公開審査会・表彰

最終候補による公開審査会・質疑応答および表彰

16:00-17:00

基調講演 「美波町の事前復興の現場から」  
影治 信良 (徳島県 美波町長)

討議者: 野本 粹浩 (国土交通省 四国地方整備局)  
小野 悠 (豊橋技術科学大学)

17:00-18:30

※英語 (一部、日本語での解説)

Habitat Recovery from Disasters  
災害からの人間居住の復興を考える

Paola Rizzi (イタリア・サッサリ大学)  
Dastid Ferati (東京大学)  
Maki Morikawa / 森川 真樹 (ボリス大学/国際協力機構)  
コーディネート: Tomoyuki Mashiko / 益子 智之

18:45-19:30

研究論文部門 / 政策・計画・設計部門 表彰式

コーディネート: 小野 悠・萩原 拓也

オンライン懇親会

挨拶 小川 紀一郎 (アジア航測株式会社)

※表彰式終了後の開催を検討しています。

9:00-10:30

若手・学生による復興デザイン研究発表

赤松 一澄 (広島大学)  
渡邊 萌 (熊本大学)  
大津山 堅介 (東京大学)  
磯村 和樹 (ひょうご震災記念 21 世紀研究機構)  
コーディネート: 小林 里瑛・渡邊 萌

10:30-12:00

首都大災害 いかに備え、いかに復旧するか

目黒 公郎 (東京大学)  
廣井 悠 (東京大学)  
野村 文彦 (国土交通省)  
佐藤 伸朗 (東京都公園協会)  
コーディネート: 浦田 淳司

12:40-13:25

U-30 復興デザイントーク

コーディネート: 井本 佐保里

13:30-14:30

基調講演 「復興デザインにおける理論と実践」  
福島県浪江町におけるまちづくりNPO新町なみえとの協働の現場から  
佐藤 滋 (早稲田大学都市・地域研究所)

コーディネート: 井本 佐保里

14:30-16:00

重ね合わせの復興計画 現場での実践と理論化にむけて

岡村 仁 (株式会社 KAP)  
江川 直樹 (関西大学)  
益尾 孝祐 (愛知工業大学/株アルセッド建築研究所)  
菊池 雅彦 (国土交通省)  
コーディネート: 芝原 貴史

16:15-17:45

全体フォーラム

コーディネート: 羽藤 英二・小野田 泰明・円山 琢也・渡邊 萌

閉会

おわりに 来山 尚義 (復建調査設計株式会社)

【開催方法】 オンライン配信 (一般のご参加) / 参加費無料 ※東京大学本郷キャンパス内で開催する講演等を配信いたします。

【視聴 URL】 <https://zoom.us/j/94377744726?pwd=QUJNWw1udXlxKONxNVG2OXlOeENFQT09>  
(ミーティング ID: 943 7774 4726、パスコード: 370264) 右の QR コードからご参加いただけます。

【主催】 復興デザイン会議

【お問合せ】 [redesign.alliance\[at\]gmail.com](mailto:redesign.alliance[at]gmail.com) (担当: 萩原) ([at] を @ に置き換えてください)

【大会 HP】 [http://bin.t.u-tokyo.ac.jp/dss/alliance\\_symposium\\_2020.html](http://bin.t.u-tokyo.ac.jp/dss/alliance_symposium_2020.html)



## 実行委員長

### 原田 昇



復興デザイン会議全国大会第二回が開催され、復興デザインの研究者、デザイナー、実践者らが集い、その活動の輪を拡げる機会を継続できることを大変に嬉しく思うとともに、今後の復興デザイン研究と人的ネットワークの発展に期待します。

**経歴** 1983年 東京大学大学院工学系研究科博士課程修了、工学博士。計量計画研究所研究員を経て、1985年より東京大学工学部助教、同助教授、同准教授を経て1999年より新領域創成科学研究科教授、2005年に工学系研究科教授に異動し、工学系研究科長、東大副学長を務めた。2020年より、中央大学教授、東京大学名誉教授。GLAFS、まちづくり大学院、復興デザイン研究体などの教育活動に貢献。専門は都市交通計画。豊田都市交通研究所長、日本交通政策研究会代表理事。国の審議会委員、学会の理事を歴任。

## 基調講演

### 影治 信良



復興デザイン会議のご盛会おめでとうございます。地方自治の現場から参加の機会を与えていただき感謝申し上げます。美波町では南海地震・津波の災害リスクや人口減・高齢化等の社会リスクを受け止め、事前防災や事前復興に取り組んでいます。本会議で得られた知見を今後の防災まちづくりに活かしていきたいと思います。

**経歴** 1955年生まれ。1978年近畿大学卒業後、日和佐町役場入庁。2006年美波町総務課長、2007年同町総務企画課長。2009年美波町長就任、2013年、2017年再任。徳島県漁港漁場協会会長などを歴任。

## 基調講演

### 佐藤 滋



大災害直後、その場所を訪れてしばらくすると、不思議な感覚に襲われる。目の前が大きく開けてくるような気分だ。多分、復興デザインに関わるものは、こうした正直な心持ちをどれだけ持続できるかが問われているように思う。被災地はそれを期待しているはずだ。復興がなった後の現場も様々なことを教えてくれる。

**経歴** 1969年4月、早稲田大学建築学科入学以来、2001年からは早稲田大学都市・地域研究所を設立して、都市計画・まちづくりの活動と研究に取り組む。イタリア、ベトナムなども含め、多様な人材・組織と連携して理論化と技術開発を進めてきた。現在、早稲田大学名誉教授、工学博士。近著に Japanese Machizukuri and Community Engagement (2020, Routledge)、まちづくり教書 (2017, 鹿島出版)。日本建築学会賞(論文)、住総研・清水康雄賞、大隈記念学術褒賞など受賞。

## 審査委員



復興政策計画設計賞  
副審査委員長・  
U-30復興デザインコンペ  
審査委員  
**乾 久美子**  
乾久美子建築設計事務所  
横浜国立大学



復興研究論文賞  
審査委員  
**姥浦 道生**  
東北大学



復興研究論文賞  
審査委員  
**大月 敏雄**  
東京大学



復興政策計画設計賞  
審査委員  
**貝島 桃代**  
アトリエ・ワン  
筑波大学、ETHZ



復興研究論文賞  
審査委員  
**小林 祐司**  
大分大学



復興政策計画設計賞  
審査委員  
**近藤 民代**  
神戸大学



復興研究論文賞  
審査委員  
**佐藤 慎司**  
高知工科大学



U-30復興デザイン  
コンペ審査委員  
**高橋 一平**  
高橋一平建築事務所



復興研究論文賞  
審査委員  
**田島 芳満**  
東京大学



復興研究論文賞  
審査委員  
**田中 貴宏**  
広島大学



U-30復興デザイン  
コンペ審査委員  
**千葉 学**  
東京大学



復興政策計画設計賞  
副審査委員長  
**徳永 幸久**  
東京地下鉄株式会社



U-30復興デザイン  
コンペ審査委員長  
**内藤 廣**  
内藤廣建築設計事務所  
東京大学名誉教授



U-30復興デザイン  
コンペ審査委員  
**野原 卓**  
横浜国立大学



復興政策計画設計賞  
審査委員長・論文賞審査委員  
U-30復興デザインコンペ  
審査委員  
**羽藤 英二**  
東京大学



復興研究論文賞  
審査委員  
**福田 大輔**  
東京大学



復興研究論文賞  
審査委員  
**本田 利器**  
東京大学



復興研究論文賞  
審査委員  
**牧 紀男**  
京都大学



U-30復興デザイン  
コンペ副審査委員長・  
復興政策計画設計賞審査委員  
**宮城 俊作**  
PLACEMEDIA  
東京大学



復興研究論文賞  
審査委員  
**森脇 亮**  
愛媛大学



復興政策計画設計賞  
審査委員  
**安原 幹**  
SALHAUS  
東京大学



復興政策計画設計賞  
審査委員  
**山口 敬太**  
京都大学



復興政策計画設計賞  
審査委員  
**渡部 英二**  
東急建設株式会社

(五十音順)

## 大会実行委員



運営幹事  
**井本 佐保里**  
日本大学



運営幹事  
**浦田 淳司**  
東京大学



運営幹事  
**小川 紀一朗**  
アジア航測株式会社



運営幹事  
**小野 悠**  
豊橋技術科学大学



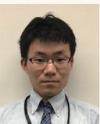
運営幹事  
**来山 尚義**  
復建調査設計株式会社



運営幹事  
**佐野 寿聡**  
アジア航測株式会社



運営幹事  
**芝原 貴史**  
東京大学



運営幹事  
**中野 寛隆**  
復建調査設計株式会社



運営幹事  
**萩原 拓也**  
東京大学



運営幹事  
**益子 智之**  
早稲田大学



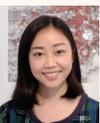
運営幹事  
**宮崎 保通**  
復建調査設計株式会社



学生幹事・幹事長  
**渡邊 萌**  
熊本大学大学院  
博士課程 2年



学生幹事  
**小林 里瑛**  
東京大学大学院  
博士課程 2年



学生幹事  
**小関 玲奈**  
東京大学大学院  
修士1年



学生幹事  
**児玉 欣輝**  
豊橋技術科学大学  
大学院修士1年



学生幹事  
**友光 俊介**  
早稲田大学大学院  
修士1年



学生幹事  
**松本 海空**  
日本大学学部 4年

# 復興デザイン会議 第2回全国大会 登壇者

## 各セッション登壇者

### Habitat Recovery from Disasters



Paola Rizzi

University of Sassari

#### Around sustainability: Italian cases from prevention to reconstruction

In Italy the history of reconstructions after severe events shows diversity in terms of approaches and perspectives and also regarding failure or success. The second half of the 20th century focused on the concept of "where it was as it was" in regard to the conservation, restoration and reconstruction of the architectural, urban and cultural patrimony. This was considered the only possible plan. However, this approach is no longer sustainable for various reasons, starting with the economic crisis. It also seems to be a failure when we analyze the data on land consumption and urban sprawl of the reconstruction extra moenia.

### Habitat Recovery from Disasters



Dastid Ferati

The University of Tokyo

All camps around the world are designed and built using the same criteria. Kakuma Refugee Camp is one of the worlds' biggest and oldest camp. After three decades of living there, the refugees have customized the space to their needs and preferences. This session will describe the self-urbanization of the camp, as well as the relationship of built-environment and socio-economic factors.

### Habitat Recovery from Disasters



Maki Morikawa

Polis University / JICA

One of the indispensable activities for recovery form the disasters is community involvement and initiatives. In my presentation, it will be discussed how such involvement and initiatives were fostered through various development projects organized by international and local donors as well as reported those difficulties. The discussion will be based on the cases of recovery from the damages by the earthquake and conflict of terrorism in Pakistan.

### 美波町の事前復興の現場から



野本 粹浩

国土交通省  
四国地方整備局

南海トラフ地震という避けられない大災害の後、復興を迅速かつ円滑に実施するための「事前復興」という仕組みが産・官・学の協調と連携によって各市町村に広がっていくことを期待しています。

### 若手・学生による復興デザイン研究発表



赤松 一澄

広島大学

津波被害が予測されている愛媛県宇和島市で育ったことが現在のモチベーションとなっています。復興デザインに如何に住民が参加するべきか、その意向に配慮し、どのような生活環境が創出されるべきか考えていきたいと思っています。

### 若手・学生による復興デザイン研究発表



渡邊 萌

熊本大学

災害は希少事象ですので、過去の災害から得られた経験則だけでは事前復興計画を推進する上で不十分であると思います。仮想的なケースをシミュレートしながら、対象地域特有の問題について演繹的に議論を進めていく必要性を感じています。

### 若手・学生による復興デザイン研究発表



大津山 堅介

東京大学

新型コロナウイルスの影響は、一時的な変化のみならず抜本的な地殻変動も進んでいるのではと感じます。こんな時代だからこそ過去を振り返り、未来を見つめ、異なる国々の人々と議論できる場として期待しています。

### 若手・学生による復興デザイン研究発表



磯村 和樹

(公財) ひょうご震災記念  
21世紀研究機構

東北で、多くの方から被災前の思い出を聞き取ってきました。その中で、地域や人それぞれに魅力や大事なことがあることを知りました。それらを災害後も受け継いでいけるような復興デザインを、考えていきたいです。

### 首都大災害



目黒 公郎

東京大学

国難的災害を我が国の現在の課題解決とあるべき将来像を実現する機会と捉えた、被災地の復興にとどまらない国の体制や将来ビジョンをデザインすることの大切さを、時間と空間をはかる長さの異なる 2 本の物差しを使って考えてみたい。

### 首都大災害・復興政策計画設計賞審査委員



廣井 悠

東京大学

正解のない問いに向き合い続ける「復興」は、被災された方の数だけ存在します。30年40年先の都市・社会をどう見据えて、現場の方々の触媒になれるか。どのようにして希望を創ることができのるか。理論化や体系化のみに留まらない新しい枠組みの学問が、果たすべき役割も大きいと感じています。

### 首都大災害



佐藤 信朗

東京都公園協会

東京都にとって震災対策は常に最重要の行政課題の一つ。事前復興による発災前の減災、発災後の迅速な復旧、復興がプログラムされていますが、実際にうまく機能するか、複合災害にどう対応するかなど課題は山積です。

### 首都大災害



野村 文彦

国土交通省

切迫化する地震、頻発化・激甚化する水災害。これまでの災害を教訓とし、早期復旧・復興の観点からも、抜本的な防災・減災対策が必要です。今後も産学官連携を通じた復興デザイン会議の更なる発展に期待します。

### U-30 復興デザイントーク



植田 瑞貴

FM ラヂオパブリック  
市民パブリシティ

平成 30 年 7 月豪雨をきっかけに、防災や事前復興の考え方を日常に根付かせるべくラジオでの情報発信を続けています。現場との物理的な距離を縮められないなかでの復興のあり方について、皆様と議論できれば幸いです。

### U-30 復興デザイントーク



下館 知也

(株) 東芝

デザインに最も必要なのは時間軸だと思います。未来に対する責任と希望を持って、自分でできることを今を捧げられることに喜びを感じましょう。そして今を一生懸命に生きましょう。

### U-30 復興デザイントーク



砂川 良太

東京大学

大切な人や財産を失った人が「生き続けたい」と思うことは本当にすごいことだと思う。復興デザインとはみんなが「生き続ける」地域をデザインすることだと思う。これからも仲間と真面目に取り組みたいです。

### U-30 復興デザイントーク

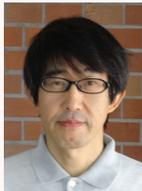


友光 俊介

早稲田大学

この度は、ご招待頂き誠にありがとうございます。本日は、私が取り組んでいる活動についてお話しさせていただくと共に、日本が抱える諸問題について皆様と議論し考えることを楽しみにしています。よろしくお願いたします。

### 重ね合わせの復興計画・復興政策計画設計賞審査委員



岡村 仁

株式会社 KAP

災害という負の事象に対して時間軸の中でそれをどうとらえ、リカバーし、未来を創るか、その過程こそが「デザイン」の原点であるように思いました。

### 重ね合わせの復興計画



江川 直樹

関西大学

街のリノベーションの時代、復興も日常も基本は変わらない。大きく解く時代から、場所の声を聞き <小さく解く・混ぜて解く> 視点で、人生を豊かに生きる場所に再編していきたい。

### 重ね合わせの復興計画



益尾 孝祐

愛知工業大学  
(株) アルセッド建築研究所

住宅復興における地域性の継承は、建築デザインやまちなみの修景といった短絡的な問題解決ではなく、地域に根付いた建築生産システムの持続性に依拠するものです。復興まちづくりにおいても歴史的風致の維持向上と地域住宅生産システムの再構築を推進が大切と考えます。

### 重ね合わせの復興計画・復興研究論文賞審査委員



菊池 雅彦

国土交通省

これまで復興に携わり、実践による知見の体系化とその継承が重要と感じています。この復興デザイン会議が研究・実務・行政を結び、次の復興の礎になることを期待しています。

# U30 復興デザインコンペ

## 1次選考通過者

### 審査員 (敬称略)

審査委員長： 内藤 廣 (建築・都市)  
副審査委員長： 宮城 俊作 (ランドスケープ)  
乾久美子 (建築) 高橋 一平 (建築) 千葉 学 (建築)  
野原 卓 (都市計画) 羽藤 英二 (社会基盤)

### U30 へのメッセージ

内容の濃いたくさんの応募がありました。まずもって応募者のみなさんに感謝したいと思います。それと同時に、なかなか収束を見ないコロナ禍のもとで現在起きている事態は、誰にとっても無関係ではない切実なものであることを感じました。さまざまな角度から投げかけられた提案は、どれも貴重なものでした。表現のつまり人も下手な人もいます。要領の良い人も悪い人もいます。審査委員の投票の結果、そうしたことにはあまり左右されずに、やはり提案内容に熱量を込めた人が残りました。二次審査では、審査委員の考え方も審査を通して浮き彫りにされるはずで、熱い議論が交わされることを期待しています。

審査委員長 内藤 廣



#### グループ 1 Plug-in Life -「接続と切断」で動く生活-

棚田有登

(早稲田大学)

COVID-19 によって都市の様々な要素が分散する状況に移行した。離散的な社会が求められる中、これからの都市を分散した要素の接続によって場所に限定されずに移動する現象と定義し、切断と接続を繰り返すことで常に社会との関係性を調整する「暫定的な共同体」を構想した。



#### グループ 2 都市の苗木が 暮らしに寄り添う

寺嶋啓介 上木翔太  
加野和奏 石橋きさら

柏原勇規 (北海道大学)

地域のもつ特性や価値を見だし、それに適応する様々な居場所をコンビニエンスストアにつくりだす。日本全国の都市に広がった苗木(コンビニ)は、そのポテンシャルを活用することで場所性を獲得し、人々の分散された自由な暮らしを纏っていく。



#### グループ 3 職住無境界住宅

～アフターコロナにおける庭園都市城下町基盤を利用したワーカースピレッジの提案～

井上玉貴 有信晴登  
原和暉

コロナ後は職と生活の境界が曖昧になった暮らしが求められる。そこで地方の近世城下町の都市基盤が残る街区に着目した。中庭を介して職と生活がゆるやかに連続し、都市からの移住者と地方の地域住民が共存するワーカースピレッジという都市像を提示する。



#### グループ 4 数寄に暮らす -江戸の知恵と共に生きる-

近重慧 村松大地(早稲田大学)  
友光俊介

COVID-19 は、私たちの現代における生活に気づきを与えてくれた。江戸に暮らした先人達は、過密な都市で“人間らしく”生き抜くための知恵を私たちの生活空間に落としつけてくれた。今なお微かに残る湧水と三田用水を、気づきを解く一つの術として捉え、現代の生活に新たな息吹を吹き込み、“人間らしさ”を取り戻していく。



#### グループ 5 根地でつながる 砂町の根っこ

小川瑞貴 河崎篤史

丹羽達也 三谷望 (東京大学)

コロナを受けて住環境に再注目し、新たな防災空地のつくり方を提案する。商店街と路地が「根っこ構造」を形成する江東区砂町の木密地域において、既存建物の改修や空地活用を通じて、住民の屋上利用を支えながら避難から復興にも有効な「根地」をつくる。



#### グループ 6 気取りすぎない生産 ～地域とつながる余地と余暇～

福井雅幸  
和田路

(京都市芸繊維大学)

時代は 2035 年、リモートワークの定着によって郊外住宅地における需要と余暇のあり方は大きく変化した。そこで、ガレージやコンビニ前の駐車場を車のための空間から個人店や人々の交流の場所に変えることでその需要を補い、郊外住宅地に持続可能なコミュニケーションを作る。



#### グループ 7 木密と団地の 「ミツ」な交流

齋藤悠宇 鷲野史佳  
植田啓太 小関玲奈  
左右田敬太 (東京大学)

コロナで移動が減少する中、住まいの異なる木密と団地が隣接する北砂。「チャネリング」する場を介した「ミツ」な交流によって個々の自宅から外に誘い出された人々は、木密と団地を歩き交いながら学び、働き、遊ぶ。そして日常的な繋がりは次の災害への備えともなる。



#### グループ 8 連担する void system

河岡拓志

(大和ハウス工業株式会社)

高密度住宅地にて、COVID-19 により分断された家々は、人が集まって暮らす意義が分からなくなるような風景を生んだ。そんな住宅街に点在するヴォイドを繋げていく宅地開発を提案する。ヴォイドから、わずかに人の気配を感じられる住宅街を考えた。



#### グループ 9 東砂地区内復興計画 散歩道による風景の継承

鈴木直樹 須賀拓輝  
高木果穂 日野裕輝

(東京大学)

ポストコロナ社会、震災復興では共有空間が求められる。積層する多様な空間や活動が開かれ連続した「散歩道」により、世代や居住環境を超えて人々は風景を共有することで、混在している市街地環境の垣根を超えて、東砂の地域性を継承し繋がりを再構築する。



#### グループ 10 モノの避難所 -生活圏を広げるモノの置き方-

石原佳奈 大貫絵莉子  
廣野智史 藤本一輝  
黛風雅 (東京大学)

災害が起きると、ヒトに限らずモノの移動も求められる。身の回りにあるモノを事前に物流拠点である新木場倉庫群に移すことで生活圏を拡大、モノを介したヒトの交流を促進し、災害時には避難拠点として使える第二のモノのための家を提供する。



#### グループ 11 窓からタンクが見える町

加藤大稀 金剛悠斗  
清水夏海 (名城大学)

コロナはコミュニティーと呼ばれる言葉の本質的な意味を問う契機であった。貯水タンクを空間に顕在化し、タンクの水を使った緑地の共同整備により木密地域の住居に変化にとんだ外部環境と人々が集う場を作りつつ、有事の際の相互扶助の基盤となる提案である。



#### グループ 12 江東グリーンベルト計画

齊藤領亮 谷本実有  
原田沙恵 矢野裕一朗  
楊叢夏玉 (東京大学)

江東区の内部河川沿いに形成された微高地に着目し、網目状の緑地を機軸とする災害復興を提案する。復旧復興機能を緑地のネットワークでつむぎ、従来の一極集中型避難に代わる、ポストコロナの「離れ」「つながる」生活を可能とする。日常ではかつての水辺利用を促進し、地域らしさを引き継いだ豊かな暮らしを支える。



#### グループ 13 共生の都市像 -復興を通じた社会環境の編みなおし-

久野遼 島山亜美  
福田暁子 野上宏樹  
後藤啓太 (東京大学)

コロナ禍が顕在化させた都市の危機的状況をどう乗り越えるか。「共生」をキーコンセプトとして1つの地域・高円寺から糸口を探る。高円寺が首都直下型地震から復興してゆく仮想シナリオから多様な価値の対立の中で人々の生きる活力が都市を更新する様を描く。



#### グループ 14 VOID の再考と場の広がり

阿子嶋翔 天谷太一  
音山尚大 菊地穂澄  
興石彩花 小林星 (東京大学)  
平野真帆

感染症の流行を踏まえた都市空間では、建物ではなくその間に生まれる void が主役になると私たちは考えました。void は三密回避だけではなく、より豊かな活動の場を生み出す可能性を持っています。では豊かな場となる void とはどのようなものなのか、広大な都市空間を持つ立川を舞台に考えました。



#### グループ 15 散り散りにまとまる都市 場のローリングストック活用

田中美海 (岡山県立大学)  
森本芽衣 安達駿  
(降旗賞人: 図版担当) (RIA)

未だ収束の見えないコロナウイルスのパンデミック、以前より続く大震災や記録的豪雨を経験し人々の「備え」への意識は高まってきた。今日注目されているのが消費しながら備えるローリングストックである。これを建築にも応用し「場のストック」を提案する。建築が人々の意識に呼びかけ、備えながら暮らす事を目標とする。

(受付順)

# 防災地理部

## 防災地理部 総評

高校生が自分たちの地元の問題を考えることを通じて、地域で生きる術を学んでいくための活動の場が防災地理部です。災害復興は、どのような形をとるにせよ、そのいずれもが、空間の力を借りることなく、十分な力を発揮することは難しい。石巻の瓦礫処理の現場の声を聞くことからスタートして、地域の個性を生かした事前復興計画づくりに5つの地域の高校生が過剰な真剣さで挑戦しました。(取材協力：鹿島建設株式会社、一般社団法人全国建設業協会)

羽藤 英二

### 防災地理部 関係者

#### 【高校教諭】

松下直樹 先生 (愛光高校)  
阿部潤也 先生 (今治北高校大三島分校)  
関本裕太 先生 (今治西高校伯方分校)  
窪地育哉 先生 (宇和島東高校)  
上甲真嗣 先生 (三崎高校)  
都築果林 先生 (八幡浜高校)

#### 【顧問】

羽藤英二 教授 (東京大学)  
山本浩司 教授 (愛媛大学)  
森脇亮 教授 (愛媛大学)  
薬師寺隆彦 教授 (愛媛大学)  
新宮圭一 研究員 (愛媛大学)

#### 【コーチ】

飯塚卓哉 (東京大学)  
出原昇馬 (東京大学)  
小関玲奈 (東京大学)  
前田歩美 (東京大学)  
石井 智 (愛媛大学)  
木原拓海 (愛媛大学)

#### 【コメント】

小関玲奈 (東京大学) 益子智之 (早稲田大学)  
佃 悠 (東北大学) 宮崎保通 (復建調査設計)  
羽藤英二 (東京大学)

#### 【協力】

FM ラヂオバリバリ 植田瑞貴  
(ラジオ築土構木ノート パーソナリティ)



今治西高校伯方分校

今治西高校伯方分校です。私たちが住む伯方は、2年前の西日本豪雨の際に山際に土砂崩れが起こり、死者1名を含む大きな被害を受けました。今回は、土壌分布や砂防ダム建設に目を向けた研究に取り組みます。



今治北高等学校  
大三島分校

2年前の西日本豪雨災害で、大三島も甚大な被害がありました。島内の地質調査や、関係機関、地域の方へのインタビューを通して、今後起こりうる自然災害に対して自分たちが今何をしなければならないかを改めて考えました。



八幡浜高校  
やわらかい町を作る

海・山と共に生きる日々の暮らし、人とのつながり。復興デザインを考える中で、それらがどれだけのかけがえのないものかを知りました。大切なものを守りつつ、大きな変動を柔軟に受け止め、かたちを変えられる町。その可能性を「空き家」「教育」から発信する提案を考えました。



宇和島東高校

宇和島市は愛媛県南西部に位置し、宇和島城を中心に発展してきた町です。その発展の中で形成されてきた商店街に注目して事前復興を考えました。賑わいのある商店街、災害時に機能できる商店街、復興の拠点となる商店街の姿について思い描いています。



愛光高校  
意識が一番の防災

土砂災害警戒情報が出て、日中での下校が決まったときのみんなの喜びを今でも覚えています。南海トラフ地震、コロナ禍での避難所不足など厳しい状況下での対策案を考えました。この活動を通して少しでも防災の意識が高まってくるといいなと思います。



三崎高校  
LINK RING プロジェクト

東西に細長い半島にある伊方町は、地震弱い町と言えます。また、高齢者が多く、避難や復興作業に課題があります。安心して暮らせる町にするため、宿泊施設を兼ねた避難場所作りを軸に、人・産業・集落などを結び付けた事前復興プランを提案します。

## 復興政策賞

### 糸魚川市駅北大火における「修復型まちづくり」の早期実現

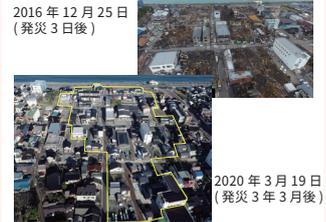
#### 新潟県糸魚川市

#### 独立行政法人都市再生機構

**事業概要** 平成28年12月に発生した糸魚川市駅北大火を受け、糸魚川市は早期復興を目指し、関係者が復興まちづくりに対する考え方を共有するための基本方針や、具体的な施策を取りまとめた「糸魚川市駅北復興まちづくり計画」を早期に策定。結果的に、それを評価した国土交通省が「今後の復興まちづくり計画の考え方」の公表に至った。また、糸魚川市は復興まちづくりを推進するため、復興推進課を設置する等、庁内体制を整備。それに合わせ、UR 都市機構は、経験や専門性のある職員を糸魚川市に派遣するなど、復興まちづくりに人的・技術的に支援した。

被災者と段階的な意見交換をしながら、8 か月で「糸魚川市駅北復興まちづくり計画」を策定、復興に取り組んだことで、早期再建につながりました。国土交通省をはじめ全国からの支援が復興の力となりました。改めて感謝申し上げます。

2016年12月25日  
(発災3日後)



2020年3月19日  
(発災3年3月後)

### 津波被災市街地復興手法検討調査

#### 国土交通省都市局

**事業概要** 東日本大震災において被災した地方自治体の復興に向けた取り組みを支援するため、被災状況等の調査・分析を行い、その成果を地方自治体に提供するとともに、被災状況や都市の特性、地元の意向等に応じた復興のパターンを分析し、これに対応する復興手法等について調査・検討を行ったもの。

この調査は多くのコンサルタント職員、現地調査員、作業チームの地整・県・公共団体職員、そしてご協力をいただいた地域の方々のもと実施されたものです。この賞は調査にご尽力をいただいた多くの方々にご贈られたものと考えております。ありがとうございました。



### 3.11 伝承ロード

#### 一般財団法人 3.11 伝承ロード推進機構

**事業概要** 東日本大震災の被災地に設置されている震災遺構や伝承施設を「3.11 伝承ロード」として結び取り組み。東日本大震災の被災地に点在する被災の実情や教訓を学ぶための遺構や展示施設などによるネットワークを震災伝承ネットワーク協議会(東北地方整備局、被災4県、仙台市で構成)が行い、その施設やネットワークを基盤にして、防災や減災、津波などに関する「学び」や「備え」に関する様々な取り組みや事業を行っている。

今後とも『教訓が、命を救う』を基本メッセージとして、震災の教訓を伝える遺構や伝承施設を結ぶ「3.11 伝承ロード」構築による防災意識社会の実現と被災地の魅力ある地域づくりを使命として活動してまいります。



(五十音順)

# 復興計画賞 / 復興設計賞

## 復興政策・計画・設計賞 審査総評

今後の復興を考える上で、さまざまな復興活動の中から、多様な審査員の見識にもとづいて、被災地に向けて未来の選択肢となる活動を選びたい。その一方で、復興デザインとは何か、その問いに答えることは容易ではありません。窮地に陥った地域で、果たしてどのような活動が求められていたのか？ 全ての人が賛成するプランもデザインも合意もあり得ない。だからこそ、答えのない問題に挑戦した足跡を讀みたい。そして、活動を支えた無名のみなさまに敬意を表します。本当におめでとうございます。

審査委員長 羽藤 英二

## 復興政策・計画・設計賞審査員（敬称略）

- 審査委員長： 羽藤 英二（都市工学）  
副委員長： 乾 久美子（建築） 徳永 幸久（都市計画）  
岡村 仁（建築構造） 貝島 桃代（建築） 近藤 民代（住環境計画）  
廣井 悠（防災計画） 宮城 俊作（ランドスケープ）  
安原 幹（建築） 山口 敬太（土木計画） 渡部 英二（復興事業）

## 復興計画賞

### 花露辺地区復興計画

#### 岩手県釜石市／花露辺自治会 独立行政法人都市再生機構

**事業概要** 集落が要望した防潮堤のない集落再生を、リアス式の地形を生かして浸水区域内に防潮機能のある道路を整備することで実現した。また住まいの復興がスムーズに進むように、地区内の限られた土地を災害公営住宅、防災集団移転促進事業用地とし、仮設住宅を地区内に整備しなかった。高台に整備された災害公営住宅は、漁業集落の暮らしに配慮した設計となっている。移転跡地は漁業集落防災機能強化事業によって、水産関係用地として整備した。これらの総合的な集落の復興計画は市とUR都市機構がH24年3月に協力協定を結び、推進した。

この度、受賞の荣誉にあずかり心からお礼申し上げます。これもひとえに地元の皆様の復興への熱意と、関係する皆様のご支援の賜物と深く感謝申し上げます。次第です。今後も益々地区の発展に尽くしてまいりますので、引き続き一層のご支援を賜りますようお願い申し上げます。



### 気仙沼線／大船渡線 BRT

#### 東日本旅客鉄道株式会社

**事業概要** 東日本大震災の津波で大きな被害を受けた気仙沼線柳津・気仙沼間（後に前谷地・柳津間延伸）、大船渡線気仙沼・盛岡において、従来の鉄道をBRT（バス高速輸送システム）として運行再開したものである。本事業では、専用道と一般道の併用により早期の運行開始を実現した。鉄道敷の活用による速達性・定時性の確保や運行頻度を高める等利便性の向上、まちづくりの各段階に合わせたルート設定、駅の増設等の柔軟な対応を行い、地域の実情に合致した復興に貢献する持続可能な交通手段となっている。

高い運行頻度、復興まちづくりの段階に応じた柔軟な路線・駅設定、鉄道とのシームレスな乗り換え、専用道による速達・定時運行の確保などを整備・運行計画に反映し、何より早期に実現することができました。あらためて地域の皆さまや関係機関・有識者の皆さまのご支援に心より感謝申し上げます。



### 釜石・平田地区コミュニティケア型仮設住宅の計画

#### 岩手県／岩手県釜石市 岩手県立大学社会福祉学部狩野研究室 東京大学高齢社会総合研究機構 東京大学大学院建築学専攻建築計画研究室 東京大学大学院都市工学専攻都市計画研究室

**事業概要** 岩手県釜石市平田地区の仮設住宅。仮設住宅団地区域内には、高齢者ケアの場と診療所（「医」の領域）や被災した地元の商品やスーパー、事業所（「食・職」の領域）が建設され、また、高齢者同士が見守り・見守られる関係を構築できるように、向かい合った住棟の間にデッキと屋根からなる縁側のような空間（「住」の領域）が設けられている。

大震災直後、医療看護系の先生方は既に現場で活躍中だが、それ以外の人に何が出来るのか？この問いに答えるべく、孤独死しない仮設住宅の空間配置を目指して、関連の大学生、行政人が手際よく連携して成し遂げられた計画です。地元のお医者さんが身寄りのない高齢者に「平田の仮設だったら退院していいよ」と言ってくれたとか。



### 芦屋市若宮地区の震災復興住環境整備

#### 若宮地区まちづくり協議会／兵庫県芦屋市 江川直樹（当時：現代計画研究所大阪事務所） 後藤祐介（当時：GU計画研究所）

**事業概要** 芦屋市若宮地区は約2.3haの既成市街地で、阪神淡路大震災により甚大な被害を受けた。被災した地域住民を中心として「若宮地区まちづくり協議会」が発足し、被災前の路地空間の雰囲気等を生かした復興を目指し、自力再建住宅と小規模な災害公営住宅が分散的に配置された復興計画案を検討し、住宅地区改良事業によって施工された。また、公営住宅は自力再建住宅のまちなみに馴染むスケールと通り抜け等に配慮した設計とした。こうした計画によって、近隣同士の日常的なつながりが維持され、満足度の高い復興に寄与している。

行政・住民・専門家が三位一体となって取り組み、密集市街地における複雑な権利調整、事業推進、及び既存市街地に馴染んだ住環境の再編が成就しました。「新しいが懐かしい」まちの穏やかな日常が現在も継続しているのが嬉しいですね。



## 復興設計賞

### 釜石市東部地区復興公営住宅（天神町・大町1号・大町3号・只越1号）

#### 株式会社千葉学建築計画事務所 大和ハウス工業株式会社 岩手支店／岩手県釜石市 東北大学大学院工学研究科小野田泰明研究室

**事業概要** 釜石市天神町に計画された災害公営住宅。4階建て集合住宅で、天神町仮設住宅との隣接地に整備された。共用廊下・ベランダの位置を上下階で反転させることにより、上下階での視線のやり取りに配慮している他、リビングアクセス型の間取りとするなどの試みが行われている。「建物提案型復興公営住宅買取事業」による事業であり、ハウスメーカーと建築家が協働したプロジェクトという点でも特色がある。

復興という過酷な状況下において建築家に何が可能なのか、またデザインとは何なのか、そのことを自問自答しながら取り組んでいた計画です。たくさんの方の苦勞もありましたが、このような賞を頂き、大変ありがたく、また今後に向けての励みにもなりました。どうもありがとうございました。



### 甲佐町営白旗団地・乙女団地災害公営住宅

#### シーラカンズ K&H 株式会社 熊本県／熊本県甲佐町

**事業概要** 熊本県甲佐町にある災害公営住宅。2戸1の住棟を敷地内にすらして配置することで、周囲のスケールに合わせた農家型災害公営住宅である。白旗団地・乙女団地共に、3種類の住戸タイプからなる同じ構成の住棟を、敷地に合わせて配置している。また、構造材や仕上げ材などは地場産材とし、地場工務店で施工しやすい設計になっている。

部屋を準備するだけでなく日々のなりわいとの協調が、持続可能な地域復興につながるかと考えています。造園や田畑での作業と住まい方を考慮し「農家型災害公営住宅」として、小庇や土間といった空間が、農作業を主体とした生活を室内につながる居場所となっています。



# 復興研究論文賞 受賞者

## 審査員（敬称略）

審査委員長：原田昇（交通計画）

姥浦道生（復興制度） 大月敏雄（建築計画） 菊池雅彦（復興計画）  
小林祐司（避難行動） 佐藤慎司（海岸計画） 田島芳満（海岸計画）  
田中貴宏（都市計画） 羽藤英二（交通計画） 福田大輔（交通行動）  
本田利器（地震工学） 牧紀男（都市防災） 森脇亮（環境工学）

## 審査総評

国内外の復興に取り組んでいる個人、自薦・他薦合わせ 26 名の応募者に関して、彼らの主要論文・関連論文を推薦理由も参照し、13名の審査員で評点付け、審査委員会にて受賞者を決定した。復興に関わる学術的な理論や研究方法論の構築、知見や技術の体系化など、多彩な研究者の中から、復興デザインへの貢献や地道な継続を重視しての選定となった。この論文賞の取組みが、復興研究の多様な展開を推し進める一助となることを期待する。

審査委員長 原田昇

## 最優秀賞

持続的で住みよい復興を阻害しないために自主住宅移転再建に対する空間的な誘導がある！と指摘した研究ですが、従来の計画論の域を超えません。

今後は復興期に生じる都市空間変動の不確実性に対処する「適応力」に着目し、変動適応学への転換を目指します。

熊本地震の被災地の現場で学生や同僚の先生等と一緒に続けている支援活動をきっかけとして生まれた論文を評価いただきありがとうございます。学生や同僚の先生方等と一緒に受賞したと受け止めており、今後も地元大学として現場に長期的に関わっていきたいと思います。



### 近藤 民代

**経歴** 1975年滋賀県出身。2003年に神戸大学大学院自然科学研究科で博士（工学）を取得。2008年10月から神戸大学大学院工学研究科建築学専攻准教授。著書「米国の巨大水害と住宅復興—ハリケーン・カトリーナ後の政策と実践」（日本経済評論社）他。専門は居住環境計画と住宅復興。



### 円山 琢也

**経歴** 1976年生まれ。1999年東京大学工学部都市工学科卒業。その後、同大学院、助手等を経て、2008年より熊本大学准教授。博士（環境学）、技術士（建設部門）。現在、熊本大学くまもと水循環・減災研究教育センター准教授。

## 優秀賞（若手：40歳未満）



### 小谷 仁務

**経歴** 2016年9月京都大学工学研究科博士課程修了。博士（工学）。2017年4月より京都大学防災研究所にて特定研究員として研究に従事した後、同年7月から東京大学新領域創成科学研究科にて助教として研究・教育活動に従事。2020年4月より東京大学工学系研究科総合研究機構助教。

今回、優秀論文賞という身に余る賞をいただき感謝申し上げます。これまでの論文の共著者や調査協力者にもお礼申し上げます。何よりも現場で日々格闘されている方々に敬意を表します。今後は自然科学や人文社会科学分野との一層の共同により総合的に災害研究を推進していく所存です。



### 佃 悠

**経歴** 福岡県出身。2006年東京大学大学院工学系研究科建築学専攻修士課程修了。ビルマネジメント会社勤務を経て、2012年東京大学大学院工学系研究科建築学専攻博士課程修了、博士（工学）取得。2012年東北大学大学院工学研究科都市・建築学専攻助教、2020年同准教授。共著に、「集合住宅の新しい文法」。

この度は、大変栄えある賞を頂戴し光栄に思います。今回ご評価いただきました東日本大震災被災地での研究は、現地のみならずご協力無しには実現できなかったものです。まもなく、発災から10年を迎えますが、引き続き被災地や社会に貢献できる研究を行ってまいりたいと考えております。



### 河瀬 理貴

**経歴** 1995年岐阜県生まれ。2017年神戸大学工学部市民工学科卒業。2018年同大学院市民工学専攻博士前期課程修了。同年に同大学院市民工学専攻博士後期課程へ進学後、2020年4月東北大学情報科学研究科人間情報科学専攻博士後期課程へ転入学。

このたびは、復興研究奨励論文賞という栄えある賞をいただきありがとうございます。指導教員や共同研究者など多くの皆様に改めて御礼申し上げます。今後も、復興研究に寄与できるように、救援物資支援の研究を追い続けていきたいと思っています。



### 佐藤 嘉洋

**経歴** 熊本県出身。熊本大学大学院自然科学教育部工学専攻博士後期課程3年/熊本大学くまもと水循環・減災研究教育センター特別研究員。2018年熊本大学大学院自然科学研究科博士前期課程修了、修士（工学）。

この度は栄えある賞を頂き大変光栄に思っております。私の研究は、多くの方にご協力頂いた熊本地震発災直後の調査活動が原点で、皆様あつての受賞と感じております。微力ではありますが、これからも地域の方々と共に復興の途を歩んでいきたいと考えています。



### 須沢 栞

**経歴** 新潟県出身、新潟大学卒業、同大学院博士前期課程修了。現在は、東京大学大学院工学系研究科建築学専攻博士課程に在学中、日本学術振興会特別研究員も務める。学部4年時に福島県の応急仮設住宅を訪れたことをきっかけに、被災後の居住地移動について仙台市や盛岡市を中心に研究を行っている。

仙台市、盛岡市の支援団体及び住民の皆様を支えられ、この賞を賜りました。災害後は、どこで・だれと・どのように暮らすか?といった極めて身近で本質的な選択を迫られますが、それを支える環境や体制を整えられるよう、今後も研究活動に励みたいと思います。